
特集 つくられる地域, こわされる地域

歴史認識の枠組としてのアフリカ地域 世界史との接点を探る

**Africa Region as a Framework of Historical Recognition :
Search for Contact Point with World History**

富永 智津子*

TOMINAGA Chizuko

キーワード：アフリカ, サハラ以南アフリカ, 世界史, 復権, 教科書

KEY WORDS: Africa, Black Africa, World History, Restoration, Textbook

World History published by Iwanami Bookshop recently is one of the well-known and established series of this kind. The titles of the articles in this volumes show the perception of the Japanese historians in general. Everyone can easily recognize from the titles of each volumes that the “World of Islam”, “World of South Asia” and “World of South-East Asia” are included in the title, but not the “World of Africa” as well as Latin-America and Oceania in spite of that geographical size. This shows that Africa has never been recognized as one of the “World” in terms of historical perception. Why and what is the reason?

This article will discuss about this question based on the analysis of the various books on African History including *General History of Africa* published by UNESCO.

For Africanists, it is one of the big questions whether African Continent can be dealt with as one historical entity or should be divided into North Africa and Sub-sahara Africa. In Japan there is a strong tendency to divide into the two. UNESCO series took the side of “Africa as one continent” because of several reasons. It is suffice to say here that idea of the editors of the UNESCO series towards Africans is the unity of the African Continent rather than revenge towards European imperialism.

One of the obstacles which prevent us from the historical perception like UNESCO's is the text book of world history for high school students in Japan. Look at the proportion of African history in the text book, which is 4% at best.

* 宮城学院女子大学国際文化学科教授 Professor, Miyagi Gakuin Women's College

はじめに

1997年から刊行されはじめた『岩波講座 世界歴史』(全28巻, 別冊1)の各巻のタイトルを見ると, 「南アジア世界」, 「東南アジア世界」はあるが「アフリカ世界」はない。「アフリカ」は, 『イスラーム世界とアフリカ』との表題で第21巻に登場するが, あくまでもイスラーム世界の「境域」としての位置づけである。ちなみに, 「イスラーム世界」は上記の他に第10巻と第14巻にも登場し, ヨーロッパと並ぶ世界史の中核地域としての重要性を際立たせている。

これは, 「講座」物のひとつの事例であるが, 日本史・東洋史・西洋史で世界史を組み立てていた時代にくらべると, 「南アジア世界」や「東南アジア世界」, あるいは「イスラーム世界」といった地域世界の登場によって, 豊かで, 動的な世界史像が提示されるようになったことは疑いえない。しかし, アフリカ史を専攻する者のひとりとしては, 不満も残る。ラテンアメリカやオセアニアとともに, アフリカは, いまだかつて「地域世界」のひとつとして世界史を動かす情報の発信地であったことはなかったということになるからである。この歴史認識は, 文部省検定の世界史教科書によっても共有されている。しかもこれは, 程度の差こそあれ, 世界的な傾向であるといってよい。しかしそれは, いったいいかなる根拠にもとづくものなのか。「アフリカ」という地域の側の問題なのか, 世界史像を構築する側の問題なのか。それとも, アフリカ史研究者の力不足が原因なのか。あるいは, 本特集のテーマに即していえば, 「アフリカ世界」はこれから「つくられる地域」なのだろうか。

1981年から刊行がはじまり, 1993年に完結したユネスコ(編)『アフリカの歴史』(全8巻)は, 以上のように, 世界史の中で正当に評価されてこなかったアフリカ史の復権を目標として編まれた。具体的には, 「1960年前後から輩出しはじめた多数のアフリカ人歴史家を含めて, 現代世界の第一線の研究者を総動員し, 人類文明史におけるアフリカの位置を定め, その歴史の再定義を試み, アフリカ人の達成と貢献を積極的に再評価」(第1巻, 「日本語版はしがき」)しようとした試みである。

本稿は, アフリカ史研究のひとつの到達点であるこのユネスコの試みを軸に, 「アフリカ」と世界との関係を, わが国における最近の研究成果を視野に入れながら検証することを目的としている。それによって, どのような「アフリカ」が浮上するか。

まず, そもそも地域としての「アフリカ」を, どのように設定するかという問題から話をはじめることにする。

I. 「アフリカ」という地域の枠組について

「アフリカ」という場合, サハラ以南のアフリカを指す場合が多い。それは, アジア経済研究所から出版された地域研究シリーズ11(I)『アフリカ』(1991年)の「総論」に書かれているように, 「北アフリカは, 社会文化的な面でむしろ中東のアラブ地域との同質

性が高く、……サハラ以南のアフリカの抱える問題について同一の水準で語ることが難しくなってきた」(8ページ)という状況による。少なくとも日本では、特に断らない限り、そう捉えることが暗黙の了解となっている。その一方、島嶼部を含めアフリカ大陸全体を、意図的にひとつの歴史の実体として扱っている文献がある。ユネスコ(編)『アフリカの歴史』はその代表的な事例である。これと同じ立場に立つ邦語文献として、ここでは川田順造『アフリカ』(朝日新聞社、1993年)、小田英郎(編)『国際情報ベーシックシリーズ・アフリカ』(自由国民社、1996年)をとりあげよう。

1. ユネスコ(編)『アフリカの歴史』の場合

第1巻(日本語訳)には7ページ分の「序文」が付され、『アフリカの歴史』を編纂するにあたってのいくつかの見取り図が描かれている。そのひとつが、「アフリカ大陸をひとつの歴史の実体として考えよう」という提言である。その背景にあるのは、「アフリカの真実の歴史を覆い隠してきた神話や偏見」(28ページ)を除去しようとする強烈な意図である。つまり、アフリカ大陸をサハラ砂漠によって南北に区分するやり方は、「アフリカの過去に関する客観的な研究を著しく妨げてきた」(29ページ)大きな要因であるというのである。もう少し詳しく、その内容を紹介しよう。

「太古の昔から“白いアフリカ”と“黒いアフリカ”の間には分裂があり、両者はたがいの存在を知らなかったという考え方を裏づけそうな一切のことがらが強調されてきた。たとえば、サハラ砂漠は、民族諸集団や人種間の混合、あるいは砂漠の両側で発達したいくつもの社会の間での商品や慣習や思想の交流を妨げる、踏み込みがたい空間だとされてきた。こうして、古代エジプトやヌビアの諸文明と、サハラ以南の諸民族の文明との間には、相互の影響を密閉してしまうような境界が引かれたのである。

サハラ以北のアフリカの歴史が、サハラ以南の歴史より以上に、地中海域の歴史と密接な関係を結んできたことはたしかである。しかし、現在では、言語や文化の相違を越えて、アフリカ大陸のさまざまな文明は、程度の差こそあれ、たがいに何世紀も昔からの古い絆で結ばれた一群の諸民族と諸社会から生まれた歴史上の産物であることが広く認められている」(28-9ページ)。

アフリカ大陸の一体性を強調するこの「序文」の考え方は、続く「プロジェクトの説明」の章において次のように再確認されるとともに、それと関連して、プロジェクトの目標が明確化されている。

「このプロジェクトでは、アフリカを一体として扱う。これは、今日までに公刊された著作であまりにも細分化されることの多かったこの大陸の各地方間の歴史的諸関係を明らかにするためである。……このプロジェクトは、……アフリカの遺産を評価する場合にきわめて重要な力となると同時に、大陸の統一に役立つさまざまなファクターを明らかにするものでなければならない」(36-7ページ)。

ここでは、ユネスコのアフリカ史編纂事業はアフリカ大陸の一体性を掘り起こす作業でなければならず、それは未来のアフリカ大陸の統一に向けての第一歩となるはずだ、との力強いメッセージが発せられている。このメッセージを、パン・アフリカニズムの流れに位置づけてもよいだろう。パン・アフリカニズムとは、第二次大戦後にアフリカで高揚し、「アフリカ統一機構」(OAU)の創設へと結実したアフリカ地域統合の理念である。そのパン・アフリカニズムを歴史学の分野で支援しようとするのが、アフリカ大陸を歴史的事実体として提示しようとするこのプロジェクトの大きな目標であることがここに示されている。

2. 川田順造『アフリカ』の場合

川田は、序の中で「二つのアフリカ」と題した節を設け、地域からの視点を重んじる世界史の中でアフリカはどのような切り取りにもとづいてとりあげられるべきだろうか、と自問自答している。「二つのアフリカ」とは、もちろん北アフリカと、サハラ以南のアフリカのことである。川田は、従来の世界史では、二つのアフリカは分けてとりあげられることが多かったとしながら、次のように述べる。

「……多くの面で異なる二つのアフリカを、この本ではあえて一つの地域として、統一した視点からとりあげたい。その理由は、差異を示しながらも二つの地域は、古い時代から互いに深くかかわりあうものとして存在してきたからである。……また、この本では、環地中海世界、環インド洋世界、環大西洋世界という三つの海をはさんだ交流のなかでのアフリカ大陸を、他の大陸との関係で問題にしてみたいからである。その際、北アフリカとサハラ以南アフリカとが、深くかかわりあいながら対照を示してきたということが、歴史における“地域”を考える重要な視点になるだろう」(7-8ページ)。

川田の視点は、ユネスコの視点とは異なっている。ユネスコが、「二つのアフリカ」の相違を認めながらも、歴史的事実体としての統一性を探ろうとしているのに対し、川田の視点は、逆に、「二つのアフリカ」が、相互にかかわりあいながら「対照」的な文化圏として展開したことを重視しているからである。その背景には、サハラ以南アフリカを「無文字社会」で、車輪を発明することのなかった社会として特徴づけることによって、車輪を駆使した文字社会である北アフリカ社会との差異に注目してきた川田の文化人類学的アフリカ観があるといえるだろう。その結果、本書の内容は「黒人アフリカ」に集中しており、その傾向は近現代になるほど強い。

3. 小田英郎(編)『国際情報ベーシックシリーズ・アフリカ』の場合

ここでは、第一章「アフリカの概観」の一節「地域としてのアフリカ」において、この問題が論じられている。小田は、「まぎれもなくひとつの大陸である」アフリカを、周辺島嶼部を含めてひとつの大陸として把握する根拠について、次のように記している。

「最近では、歴史(ときに近現代の歴史)や政治・経済の展開される場としてのアフリ

カは、サハラの前と南に切断されるものではなく、周辺諸島嶼を含めたアフリカ大陸全体としてとらえるべきものだという見方も有力になってきている。

こうした見方は、19世紀末期から20世紀初期にかけてのヨーロッパ列強によるアフリカ分割とそれに続く植民地支配といった「歴史的経験の共通性」を重視するところからでてきたものである。

こうした見方には十分な説得力がある。さらにいえば、地域としてのアフリカは、分割、植民地化といった、過去における歴史的経験の共通性だけではなく、独立期前後からこんにちに至るまでの「アフリカの歴史的復権」の追求という現代的課題の共通性によっても貫かれているのであって、それはたとえば、……ナショナリズム運動やパン・アフリカニズム運動にも、はっきりと現れているのである」(15-6 ページ)。

小田は、分割や植民地化の対象となったという共通の経験、あるいはナショナリズムやパン・アフリカニズムの追求という共通の課題から、アフリカ大陸を一体として把握しようとしている。そこには、国際政治学者としての小田の視点がはっきり出ているといえよう。テーマ別に構成された本書の内容には、北アフリカがバランスよくとりいれられており、国際関係の中のアフリカ大陸が浮かびあがる仕掛けになっている。ただし、それによって、アフリカ大陸としての歴史的一体性が見えてくるというわけではない。

以上、ユネスコ、川田、小田、それぞれの手になる著作におけるアフリカ地域の設定方法について紹介した。いずれも、アフリカ大陸を一体として扱う方針を提示してはいるが、そのスタンスや視点や理由はさまざまである。その背景には、研究者個人個人の専門分野が大きくかかわっていることも明らかである。

ところで、地球上のいかなる地域も、さまざまなネットワークで結ばれた回路によって、他の地域と結ばれている。そのあり様は、歴史的に変化し、また、分析視点によっても自在な組み替えが可能である。組み替えられた地域は、新たな歴史認識や歴史像を提示することになる。当然のことながら、アフリカという地域も、孤立したいくつもの「世界」が歴史的経験を共有することによって、次第にひとつの地域としての実体を形成してきた。板垣雄三がいう世界分割の過程で生じた「地域的統合」の人民的な民主主義の可能性、もしくはその歴史的必然性(板垣雄三『歴史の現在と地域学』岩波書店、1992年、52ページ)もそのひとつである。そして、最後に残った問題が、サハラ砂漠を挟む南北間の問題だったということになるだろう。このような視点から捉えると、「一つのアフリカ」観と「二つのアフリカ」観の間には、きわめて重大な歴史認識の違いが存在するのではないか。次に、この点について少し詳しく見てゆくことにしよう。

II. 「一つのアフリカ」、「二つのアフリカ」と歴史認識

はじめに「二つのアフリカ」と歴史認識について考えてみよう。アフリカをサハラ以南の「黒人」アフリカに限定している場合、著者や編者がその理由を述べている文献はほと

んどない。したがって、以下の考察は、東アフリカ史を研究対象としている筆者の見解であることをあらかじめ断っておきたい。

サハラ以南のアフリカ世界ほど偏見と差別によって歪曲されてきた過去を持つ地域はないということに異議を唱える人はいないだろう。ヨーロッパ人によって刻印された「暗黒大陸」と「劣等人種」というサハラ以南アフリカへのイメージは、亡霊のように、今日なお世界中を徘徊している。それは、北アフリカを含む中東イスラーム世界に対してヨーロッパ人がつくり出した負の固定観念（オリエンタリズム）の比ではない。オリエンタリズムには、イスラームという文明にたいする愛憎の混在したアンビバレンツな感情が存在したが、黒人アフリカに対しては愛も憎もなく、ただ、歴史のない「未開」で「野蛮」な地域という視点しか存在しなかったからである。しかも、そのようなヨーロッパ人のアフリカ観に寄与したのが、「黒人」アフリカ地域を何世紀にもわたり奴隷の供給地としてきた中東イスラーム世界だったことも忘れてはならないだろう。オリエンタリズム的言説によって他者性と劣等性を刻印されたイスラーム世界が、同様な他者性と劣等性を「黒人アフリカ」に付与し続けてきたのである。このように考えると、「アフリカ史」の復権とは、イスラーム世界の一部である北アフリカとともに勝ち取る問題ではなく、むしろ北アフリカに突きつけるべき要求として立ち現れてくる問題であるともいえる。同じことが、大西洋奴隷貿易の担い手であったイギリスやフランスにたいしても、当然、あてはまる。最近、イギリスのある法律家が、奴隷貿易に対する補償要求にむけて行動を起こしはじめた (*New African*, Dec. 1999; *Ibid.*, Jan. 2000 参照) 背景には、世界的な黒人差別の構造の原点を照射しないかぎり、アフリカ史 (人) の復権は不可能だという強いメッセージが込められているように、わたしには思われる。

このような歴史認識は、第三世界論や西欧中心主義史観を克服しようとしている歴史研究者の間で共有されているとあってよいだろう。そのひとりに吉田悟郎がいる。吉田は、その著書『世界史学講義——第三世界と世界史学』（下巻，御茶の水書房，1995年）の「まえがき」にあるように、この40年間、「出版界の手垢にまみれた消費市場に墮した『世界史シリーズ』や高校にしかない変な教科である官製『世界史』に抵抗して……いままでの歴史観・世界観の中に潜む〈差別の歴史観・世界観〉」（i ページ）の重要性を説き続けている。しかし、ここで扱われている対象は、イスラーム世界であり、パレスチナである。アフリカは射程に入っていない。世界史の差別構造を抉り出すとしたら、アフリカ抜きには語れないだろう。それは、吉田も認識しているにちがいない。しかし、そうならなかったのは、われわれアフリカ史研究者の力不足というしかないのかもしれない。

一方、ユネスコの「一つのアフリカ」論は、以上のような対立の構図で歴史を捉えない。むしろ、「アフリカ大陸のさまざまな文明は、程度の差こそあれ、たがい何世紀も昔からの古い絆で結ばれた一群の諸民族と諸社会から生まれた歴史上の産物である」（「序文」29ページ）との歴史認識を全面に打ち出している。この姿勢は、「総序」の中の「われわれの目的は、植民地主義者の書いてきた歴史をご破算にして、その著者たちに向かい火を

放つような歴史を書くことではない」(2ページ)という文章や、「アフリカ人の歴史的な態度は、報復的でもなく、自己満足的なものとも異なる」(27ページ)といった表現にも現れている。換言すれば、過去に蒙った被害を梃子に復権を図るより、共有できる歴史の掘り起こしによってアフリカ大陸の復権と統一を図るべきだ、ということになるだろうか。ユネスコは、過去の加害者と被害者との間に生じた垣根を取り払う方法として、あくまでもアフリカ人を主体とした歴史的「事実」の客観的な提示という方法を選択したのである。それは、「イデオロギーが具体的事実よりも勝るような理論の再構成を避けねばならない」(「総序」21ページ)という文化人類学にむけられた批判からも窺い知ることができる。万人に受け入れられるアフリカ史をめざした、国際機関ユネスコならではのスタンスということもできるだろう。

以上、「一つのアフリカ」と「二つのアフリカ」に分けて論を展開してきたが、そのどちらでもない地域区分を用いる場合があることを付記しておきたい。「中東・アフリカ」という括り方である。ここでは、その事例として栗田禎子「マフディー運動の域内連関——19世紀東スーダンと中東・アフリカ世界」(岩波講座『世界歴史』21巻, 141-62ページ)を挙げておく。「中東・アフリカ世界」として括らざるを得ない理由は、研究対象である東スーダンが、北部のアラブ・イスラーム圏とその奴隷市場となった南部の黒人アフリカ文化圏へと分裂しながらも、ひとつの歴史世界を構成してきたという経緯にある。これに類する地域はエチオピアやサハラ南縁一帯に広がっていることを考えると、「中東・アフリカ世界」という地域設定は、アフリカ地域の重層構造を明確化する地域設定であるとともに、「一つのアフリカ」に代わる地域統合の新しい地平を示すものであるといえるかもしれない。

Ⅲ. 「アフリカ地域」と世界史

冒頭で、『岩波講座 世界歴史』に関連して、「南アジア世界」、「東南アジア世界」、「イスラーム世界」の登場に言及した。ならば、「アフリカ世界」も……と、いうわけである。アフリカ研究者なら、だれもが、それを夢みている。夢みているだけでなく、努力もし、提言もしている。「アフリカ世界」の復権を、世界史との関係で考える時、どのような視点が提示されているのだろうか。まず、アフリカ史の概説書としては記録的に多くの読者を獲得したといわれる宮本正興・松田素二(編)『新書アフリカ史』(講談社現代新書, 1997年)を見てみよう。

1. 『新書アフリカ史』

本書の舞台は、サハラ以南の「黒人アフリカ」である。その目的は、「暗黒大陸」と「歴史なき大陸」というアフリカ像の解体にあり、そのアプローチとして本書は、「新しい歴史(ニューヒストリー)」の方法をとりいれている。「ニューヒストリー」の特徴は、一言でいえば、古典的な歴史学の構成要素を相対化し、女性史やエコヒストリーをも視野に

いれた「全体史」を志向することにある（ピーター・バーク（編）『ニューヒストリーの現在』人文書院、1996年、15-29ページ）。編者である宮本・松田が「ニューヒストリーの台頭にみられるように、我々の歴史的関心は、これまでの西欧もしくは古典古代世界中心から離れ、広くサーキットを描いて地球の隅々まで覆うようになった。この知的衝動を支えているものは、地球的規模での人類の経験の達成を正当に評価し、偏見と誤謬に満ちたものを新しい視点で再定義したいという、きわめて現代的な、しかも人間的な欲求である。これまでのような、西欧近代主導の歴史記述だけでは、地球上の全人類の過去、その達成の全体像を把握しきれないということがわかってきたのである」（17ページ）と述べる時、本書の「アフリカ世界」の復権は、「全体史」の一部としての復権として提示されているといえるだろう。ただし、女性史やエコヒストリーまで含めることはできなかったが……。

2. 川田『アフリカ』

再び、川田の『アフリカ』に登場してもらうことにする。というのは、本書は、「地域からの世界史」シリーズの9巻にあたり、世界史へのアフリカ地域からの射程という視点が、編集方針となっているからである。川田も、この視点を意識し、随所に「世界史への問いかけ」を行なっている。たとえば、アフリカの特徴である「無文字社会」を例に、それに類する現象が、他のどの社会にも見られることに注目する。そして、アフリカの無文字社会には、「歴史を必要とした社会と、そうでない社会が存在したように、世界史の視野で見ると、ユーラシアの一部の社会のように、歴史を必要とし、暦法を生み、社会に起こったことやそれについての記憶を外在化する形で文字にしるした社会と、そうでない他の多くの社会があった」（17-8ページ）ことへ読者の注意を喚起する。川田は、このような方法で、絶対年代にもとづく編年史の観点から見ると欠陥だらけのアフリカ史が、世界史のあり方に対する根源的な問いを突きつけているとする。また、別の個所では、現代以後の社会にとって基本的な重要性を持つ「民族と国家の問題、技術における進歩と停滞、「開発」が提起する問題、文化における伝統と連続および未来に向かっての変革の問題」（209ページ）について、アフリカは極限的ともいえる状況を示しており、それこそ「アフリカ」という地域が世界史に突きつけることのできるもうひとつの根源的な問いであるとするのである。そこには、地域間の支配と従属の構造をつくり出し、地球的規模で環境破壊をもたらした資本主義的生産性と効率の増大への価値志向への疑問が提示されている。アフリカ史は、ヨーロッパ近代が生み出した価値や視点に代わる多様な選択肢の可能性を示すことによって、世界史の中に居場所を見出すことになる。

3. ユネスコ（編）『アフリカの歴史』

第1巻の導入部分を注意深く読むと、本書のアフリカ史への眼差しが浮かび上がってくる。いくつかを列挙してみよう。

- ・「アフリカ人は、独自の様式でつくりあげ、何世紀にもわたって開花し、存続しつづ

けてきた独創的な文化の創造者である」(「序文」28ページ)。

- ・「アフリカ諸民族の歴史は、歴史的・文化的文脈の中に位置付けられるべきであり、単なる人種史(エスノ・ヒストリー)ではない」(「序文」29ページ)。
- ・「アメリカへ船積みされた奴隷たちの抵抗、アフリカ人の後裔たちの、独立戦争や民族解放運動への不断の大量参加が、……人類に関する普遍的概念をつくりあげるのに役立った」(「序文」33ページ)。
- ・「アフリカの文化遺産は、合衆国南部からカリブ海を越えてブラジル北部、さらには太平洋岸のいたるところに見られる」(「序文」33ページ)。
- ・「インド洋を介したアフリカと南アジアとの諸関係、及び相互の交流によって、他の文明に与えたアフリカ側の貢献」(「序文」33ページ)。
- ・「『アフリカの歴史』は、国際的協力の進展と、正義と進歩と平和への熱望を抱く諸民族間の連帯を強化するのに貢献できるはずである」(「序文」34ページ)。
- ・「『アフリカの歴史』は、経済と技術に関するさまざまな闘いに没頭している一時期にあつて、アフリカの本当の顔を明らかにし、人間の諸価値に関して独特な概念を提出する」(「プロジェクトへの説明」37ページ)。
- ・「アフリカ人同士、さらにはアフリカと他の大陸の間の共通の絆を自覚して、アフリカの過去を正しく理解することは、地球上の諸民族の相互理解にとって著しい貢献となる」(「プロジェクトへの説明」39ページ)。

以上、脈絡なく並べたが、キーワードを拾っていくと本書が「アフリカ地域」の歴史を通して、何を世界に訴えようとしているかがより明確になる。それは、アフリカ文化の独自性、諸民族の歴史としてのアフリカ史、人類史への貢献、諸民族の連帯への貢献、価値の多様化への貢献、諸民族の相互理解への貢献、である。こうした、一般読者向けの説明のあとで、本書は、アフリカ人に対して次のように語りかける。

「アフリカ人にとって、アフリカの歴史は自己陶醉に誘う鏡でもないし、今日の時代がつきつける課題や責務を回避するための巧みな弁解となるものでもない。……今日、アフリカを苦しめているすべての悪弊は、将来にあずけたすべての可能性を含めて、歴史が伝えてきた無数の諸力の結果なのである。……歴史とは諸民族の記憶なのだ。自己に立ち戻ることは解放の触媒として作用する。……この触媒によって、人格に宿る基本的な諸力が明らかにされ、同時に人間の意識を潜在意識の根の中にかたく閉じ込めているコンプレックスを解き放つのである」(「総序」4ページ)。

ここには、アフリカ史の復権は、アフリカが直面している苦難を他に転嫁するためのものではなく、民族の記憶を掘り起こし、世界史の中に正しく位置づけることによって、植え付けられてきたコンプレックスからアフリカ人を解き放つのだ、という強いメッセージが込められている。アフリカ人研究者を中心として編まれた本書ならではの視点であり、歴史的にも経済的にも抑圧する側の地域に身を置いているわたしには、決して書くことの

できない一文である。

以上、3冊をとりあげ、それぞれが、どのように「アフリカ地域」と世界史との関係を捉えているかを紹介した。その特徴を抽出すると、「全体史」の一部としてのアフリカ史、西欧近代に代わる新しい価値の発信地としてのアフリカ、世界の諸民族の連帯と相互理解に資するアフリカ地域、ということになるだろうか。

ところで、吉国恒雄は、著書『東南アフリカの歴史世界——グレートジンバブウェ』（講談社現代新書、1999年）の中で、「アフリカは世界史の玄関にすら入っていない、いやむしろ世界史の玄関が一つとは限らない……そんな人間の文明と歴史の根源にかかわるところから論戦になる大陸」（208ページ）と形容している。地域に、多様な組み替えが可能のように、世界史にも、多様な入り口があってよい。「アフリカ世界」を世界史に位置づけようとしたら、発想のコペルニクス的転換を必要とするからである。その下地のない状況で、「アフリカ世界」に市民権を与えよと、いくら声高に叫んでも受けいれられるものではない。そういう状況を固定化している元凶、それが世界史の教科書である。

IV. 高校世界史教科書とアフリカ

高校の世界史教科書に見られる世界史像の変遷については、鳥越泰彦が「戦後世界史意識の変遷——高校世界史教科書の分析から」（青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第44号、2000年、33-45ページ）と題する論考において、詳しく分析している。そこでは、1951年から99年の間を、文部省の学習指導要綱の改訂に沿って7期に区分し、要綱の特徴と教科書の変化が検証されている。大づかみにその流れを紹介すると、時代別構成から文化圏重視へ、ヨーロッパ史認識の変化、現代史重視、といったところであろうか。その他、アフリカが登場するのは、1960年代の「アフリカの独立」を契機としていたこと、初めて「アフリカ世界」が登場させた教科書（吉田悟郎他著『高校世界史』実教出版、1979年）が出版されたことが、本論の関係では重要であろう。この教科書は、従来の世界史像とあまりにも違うために敬遠され、市場から消えた。このことが示唆しているのは、文部省の検閲があるからといって、斬新な教科書が編めないわけではない、ということである。問題の一部は、むしろ市場にあるのかもしれない。

いずれにせよ、戦後になって導入された「世界史」の枠組は、西洋史として出発した原点からどれだけ変化したのだろうか。時代別の編年史が文化圏別（現在、ここに「アフリカ世界」を入れている教科書はない）の構成に、「地理上の発見」や「新大陸の発見」が「大航海時代」に代わったところで、「西欧諸国によって、この地上のあらゆる地域は、史上はじめて結びつけられたかのような」（杉山正明『遊牧民から見た世界史』日本経済新聞社、1997年、367ページ）世界史像は、少しも変わっていない。

さて、わたしが初めて執筆にかかわった高校世界史教科書は、西川正雄他著『世界史B』（三省堂、1994年）であった。アフリカ関連の項目のタイトルとキーワードを並べて

みよう。

10—18世紀

- ・アフリカ諸王国（ガーナ王国，マリ王国，ソンガイ王国）
- ・インド洋貿易と東部アフリカ（スワヒリ，ポルトガル，オマーン）
- ・西部アフリカと奴隷貿易（アシャンティ，ダホメ）
- ・南部アフリカとケープ植民地（ケープ，カラード）

19世紀

- ・オマーン勢力と東部アフリカ（ザンジバル，クローヴ，奴隷）
- ・西部アフリカとパーム油貿易（パーム油，ダホメ，探検家，キリスト教宣教師）
- ・ブール人の「大移動」と南部アフリカ（ブール人，英領ケープ植民地）

20世紀

- ・アフリカにおける民族解放運動の展開（英領西アフリカ国民会議，パン・アフリカニズム）
- ・アフリカの独立（ガーナ，アフリカの年，アフリカ統一機構，コンゴ動乱）
- ・アフリカの困難と南北問題（新国際経済秩序樹立のための宣言）
- ・他地域の変化（ジンバブウェ共和国，アパルトヘイト，ナミビア，マンデラ）

なお、10世紀以前のエジプトは「西アジア・地中海世界」に、イスラームに関しては「イスラム世界の成立と発展」の中に組み込まれている。この部分を除き、上記の項目部分のみのページ数を集計すると約14ページ（総ページ数の4パーセント）になる。他の教科書、たとえば、三省堂書店の『詳説世界史』の7ページ（総ページ数の2パーセント）や、高校世界史の市場をほぼ独占している山川出版社の『詳説世界史』の4ページ（総ページ数の1パーセント）に比べると、時代的にも项目的にも幅広いアフリカが盛り込まれていることがわかるだろう。

とはいえ、総ページ数に占めるアフリカ地域のパーセンテージをはじき出して、改めてわたしは愕然とした。それは、世界地表面積の20パーセント、世界の国家数の29パーセント、世界人口の13パーセントを占めるアフリカ大陸の将来が、世界平和や地球環境に与える影響を考えてみるだけでもアフリカという地域を知る必要があるという量的な問題はさておいても、世界史の中心に君臨しているヨーロッパ列強を、奴隷として、労働者として、虫けらのように扱われながら支えてきたアフリカ地域を、このように無視してよいものだろうか、という率直な驚きであった。

世界史の構成要素としてとりあげられている「古代文明」や「近代国家」や「帝国主義国家」が、歴史を動かしてきたことは否定しない。しかし、それらは、周辺地域の犠牲の上に成立していたのである。この構造は、地球的規模で現在も続いている。抑圧されてきた地域の歴史を無視し続けるかぎり、この構造を変化させることはできないだろう。それ

は、女性の社会的地位の向上や、男女の雇用機会の平等などが叫ばれるわりには、一向に変化しない現状とも酷似している。女性の歴史が、世界史教科書の中でとりあげられたことが、いまだかつてないからである。

おわりに

わたしは、ある女子大学の国際文化学科でアフリカ地域研究を担当している。この学科は、1989年に短大部門の一学科として創設された時から、日本を含む東アジア、東南アジア、南アジア、中東、アフリカ、オセアニアの地域研究を中心に組まれたカリキュラムのもとで、「第三世界」から世界を見る視点の重要性を学生に伝えようとさまざまな試みを行ってきた（1999年に四年制に移行、ヨーロッパ地域を増設した）。「外国＝欧米」という世界認識に染まり切っている学生の頭に、南アジアやアフリカのスペースをつくってもらうのは、なかなかの大事業である。

カリキュラムの中で、もっとも効果をあげているのが、アフリカ、インド、オセアニア、フィリピンなどで実施される海外実習である。フィールドワークを軸としたこの実習は、毎年2箇所で行なわれ、学生の約半数が参加してきた。経済的な豊かさに馴れ切った学生にとって、「第三世界」の多様性や、貧富の格差を膚で実感することは、世界観を転換させるよいきっかけになる。そこから、日本で進行している国際化や、地球的規模での貧富の格差が、透けて見えてくるからである。

しかし、ここ数年、自分さえ「幸せ」なら、他の国や地域のことなどどうでもよい、という若者が増えていることも事実である。それは、現実的な「手に職」をつける学科や学部の人気と表裏一体となっている。この傾向は、冷戦後の経済グローバル化の中中で増幅され、理念なき現実主義（拝金主義）の横行に拍車をかけている。

そういう今だからこそ、大胆な地域の組み替えや、見直しの上立った世界史像の提示が、ぜひとも必要である。西川正雄は、『現代史を読む』（平凡社、1997年）の中で、イスラーム地域研究者三木亘の言葉を引用しながら、次のように述べている。

「ヨーロッパ中心主義に大きな疑問符がつけられたことはもはや否定できない。そのことは、われわれに二重の意味で重大である。一つは、疑問符がつけられた以上、それに代わる世界史像を求めなくてはならない、という一般的な問題として。もう一つは、三木の言を借りれば、ヨーロッパ人自身はあらたな世界史像を構成するべくさまざまな史的営為をかきねているのに、ヨーロッパ人でもない日本人が“後生大事にこの世界史像の眼鏡をかけつづけている”という“あわれというよりはむしろ滑稽”なこととして」（124-25ページ）。

新たな世界史像——それは、21世紀の世界を見通せるような理念やメッセージを、次世代に伝えるものでなければならない。その真価が、これまでもっとも疎外されてきた地域である「アフリカ」をどのように位置づけるかによって問われる、そのような時代はすぐそこまで来ている、とわたしは思いたい。